

【調査報告】

マッサージなど触れるケア技術における 看護学生の学びについての文献検討

Nursing Students' Learning Outcomes in Touching Care Techniques: A Review of Existing Literature

鬼頭 和子, 鈴木 啓子, 平上久美子

要旨

本研究は、国内におけるマッサージなど対象者に直接触れるケアを実施した看護学生の学びについて文献検討を行い、精神科看護における看護技術教育を検討する。文献検索方法は、医学中央雑誌Web版Ver.5を用いた。2014年10月までに発表された文献から「マッサージ」・「教育」をキーワードとし、原著論文・会議録を除く看護文献・内容が確認できるよう抄録がある文献に絞り、51件の文献が検索された。51件の抄録を精読し、そのうち抄録の内容から、マッサージの実施者が看護学生以外である文献は除外し、看護学生を対象にマッサージなど触れるケアについて検討している文献に限定し、7件の文献を研究対象とした。

その結果、マッサージの演習を受けた学生は、「特別な技術がなくても気持ちがいマッサージができる」「今までマッサージがここまで効果があると思わなかった」など、マッサージを実際に実施することでケアに対する自信を感じ、ケアを実施する動機づけになっていた。そして、実習の場面では、患者との距離が近く親しみを感じ、コミュニケーションの機会となっていた。

今回の文献検討では、マッサージのケアを実際に学生自身が演習で体験し、演習で習得したケアを臨地実習で活用することで、学生は様々な体験を通し成長の機会に繋がっていた。近年の学生の特徴から、今後はケアリング力が高い学生を育てるためにも、看護ケアとして非言語的コミュニケーションの方法の一つとしてマッサージなどの触れるケアを看護教育の中に導入する意義は大きいと考えられる。

I 文献レビューの背景と目的

近年、代替補完療法への関心が高まり、我が国においても、近年代替補完療法の教育が導入されつつある。国外では、米国で1992年に代替補完医療の研究・評価を行う国立代替補完医療センターが設置され、現在では、全米医学部の半数以上が代替補完医療の講義・教育を行っている（今西, 2010）。ヨーロッパ諸国では、英国がもっとも代替補完療法への関心が高く、すでに7割以上の大学の医学部に代替医療関係の機関ができ、教育課程も設置されている（今西, 2010）。

我が国の看護教育においては、看護系大学で代替補完療法に関する科目が導入されつつある（小山他, 2013）。代替補完療法の具体的な教育内容としては、マッサージが最も多く、次に、アロマセラピー・指圧・音楽療法などがある（西山他, 2013）。厚生労働省の看護教育の内容と方法に関する検討報告書（厚生労働省2014）で

は、看護学士課程において看護実践能力を育成する上での「看護基本技術」として「安全確保の技術」があり、その中に「リラクセーション、指圧、マッサージ」の知識や技術が含まれている。これらのリラクセーション技術であるマッサージや指圧など触れるケアは、対象者に様々な効果を与えることが明らかになってきている。

川原ら（2009）は、タッチングやマッサージの文献検討を行い、介入効果として、ストレスの緩和や、苦痛緩和の効果・不安の軽減・血圧の上昇を抑制する効果があることを報告している。また、緒方ら（2013）は、ソフトマッサージに関する文献検討した結果、その効果として、コミュニケーションの向上や信頼関係構築などの効果について報告している。

一方で、近年の看護学生の特徴として、ネット社会の影響などから言語でコミュニケーションをとることを苦手とする学生が多く、このことから、実習を苦痛と感じる学生が多い（緒方他, 2014）。このように、言語的コミュ

ニケーションを苦手とする学生が増加するなかで、患者に直接触れるマッサージなどのケアが、コミュニケーション手段として活用できるよう演習や臨地実習で積極的に取り入れられてきている（岡田，2012）。

精神看護実習においては、看護学生は精神疾患患者への関わりづらさを抱く場合が多い（安藤他，2013）。吾郷（2001）は、精神疾患患者に初めて接する学生は、不安や緊張ばかりでなく患者の反応が乏しく対話が続かないなどの症状の特性により、実習場面では言語的コミュニケーションを看護技術として活用できず、患者との対話に困難を感じることが多いと報告している。筆者ら（2013）の研究では、精神疾患患者に対して、患者に直接触れるケアであるマッサージが、患者と関わりを持つ糸口となり、患者－看護師の関係を築く上で有効であることが示唆された。さらに、マッサージなどの触れるケアは、精神疾患患者にリラクセーションをもたらす効果もある（鬼頭，2013；鈴木他，2013）。このことから、筆者らは、精神看護実習前に、触れるケアとしてハンドマッサージ・フットマッサージの実技演習を取り入れている。実際の演習では、自律神経系機能の測定を行いリラクセーション効果の検証や、学生同士が相互にマッサージを体験することで学生たちは、「楽しい」「気持ちいい」など快刺激を実感している。この経験から、精神看護実習において、患者との対話における困難を緩和し関係を築くための方法として、ハンドマッサージやフットケアを行う学生が増えているが、精神看護実習体験上の触れるケア活用の意義について、学生の視点からの検討をしていない。精神看護学以外の領域では、原田ら（2007）が、国内の看護系大学のマッサージや指圧に関する現状について文献検討しているが、マッサージや指圧など対象者に触れるケアを行った学生の学びに関しては明らかにしていない。

以上のことから本研究では、マッサージなどの触れるケアを看護基礎教育で取り上げている国内研究を概観し、マッサージなど対象者に直接触れるケアについて学生の学びについて文献検討を行い、精神科における看護技術教育を検討する。

II 文献レビューの方法

1. マッサージなどの触れるケアの定義

本研究で取り上げるマッサージなど触れるケアとは、観察や計測目的で触れるケアは除き、部位は限定せず、手で直接触れるマッサージまたは、指圧とした。

2. 文献検索のプロセス

医学中央雑誌Web版Ver.5を用いて、2014年10月までに発表された文献から「マッサージ」・「教育」をキーワードとした。絞り込み条件として原著論文とし、看護文献を検索した。その結果検索された51件の文献の抄録を精読し、抄録の内容から実施者が看護学生以外の文献を除外し、看護学生を対象としたマッサージなど触れるケアについて検討している文献に限定した。その結果、研究対象文献は7件となった。

III 結果

1. 選択された文献の概要

選定した7件の文献を概観した結果、臨地実習開始前の学内演習での学生の学び（No.1，2，3），臨地実習にてマッサージなど触れるケア実践した看護学生の学び（No.4，5，6，7，8）に大別し、それぞれ表1，表2に整理した。1件の文献は演習での学びと臨地実習終了後の学びの両方が記載されていたのでNo.3とNo.7に結果を分けて記載した。また、No.8の文献は触れるケアについて履修した学生が卒業後どのように活用しているのかを明らかにしていた。

2. 臨地実習開始前の演習での学生の学びについて

臨地実習開始前の演習での学生の学びは3件（No.1，2，3）であった（表1参照）。

以下、学生の学びについて述べる。

1) 研究対象者

看護大学1年次の学生（No.2），看護大学3年次の学生（No.1）であった。

表1 臨地実習開始前の演習に関する文献の概要

No.	著者（年）	ケア内容	研究目的	研究対象者	研究デザイン	結果の概要
No.1	平尾由美子 福嶋 龍子 (2009)	フットケア と手足の マッサージ	老年看護演習におけるフットケアとマッサージの患者役の体験による学生の学びの検討	A大学看護学部3年生 93名	マッサージ演習後の自由記述による感想から検討	患者役の学びとして、記述数が多い順に、「気持ちよい」「リラックス」などのサブカテゴリーよりなる【心理的效果】、「循環促進」「保湿効果」よりなる【生理的效果】、「ケアに活かしていくための提案など」からなる【より良い方法】、「身体的苦痛」「心理的抵抗感」よりなる【苦痛】、および【ケアの評価】、【看護者との相互作用】の6カテゴリーが抽出された。

No.	著者（年）	ケア内容	研究目的	研究対象者	研究デザイン	結果の概要
No. 2	前田 節子 岩吹 美紀 桂川 純子 竹内 貴子 渡邊 弥生 中島佳緒里 杉浦美佐子 (2012)	ハンドリフレクソロジーと密封足浴	基礎看護技術教育にリラクゼーション技術を導入することの効果を確認し、今後の教授方略への示唆を得る	看護大学1年生134名	技術演習後、自らの技術評価や感想として記述された学生レポートを内容分析 VAS, FSのマッサージ前後の測定	患者役と看護師役の体験による気づきや学びとして、5つのカテゴリーと19のサブカテゴリーが抽出された。最も記述が多かったカテゴリーは、《効果の実感》であった。以下記述数の多い順番に《実施の評価》《動機づけ》《実施による気づき》《実施中の環境》であった。相手の反応を聞きながら創意工夫を行ったり、臨床実習での試みと考えたりなど、関心の深さが伺え、ケアの受け手と提供者の視点で思考できていた。看護ケアとしてのリラクゼーション技術を基礎看護教育へ導入する意義が示唆された。
No. 3	緒方 昭子 奥 祥子 矢野 朋実 竹山ゆみ子 田村真由美 内田 倫子 (2014)	背部と手のタクティールケア	看護学生が臨地実習で患者に触れるケアとして、患者とのコミュニケーションの手段として用いることができる、タクティールケアに準じたソフトマッサージの演習を取り入れている効果の検討	3年生に対する実習直前の学生59名	アンケート調査	回答率は98%で、手技については簡単（79%）、96%の学生が実習で使いたいと回答していた。マッサージを受けた視点としては、安心感、気持ち良い、痛みが和らぐ、眠くなる、血行が良くなる、看護ケアとして、温かさが伝わる、刺激や侵襲がすくないであった。また、くすぐったい、強めのマッサージが良い、オイルが不快であった。実習前の演習の効果では手技の再認識ができ、いろいろな場面で使える、実習ですぐ実践できるという結果であった。

2) 実施したケアの内容

臨地実習前の演習で行ったケアの内容は、フットケア（No.1）、足部マッサージ（No.1）、手のマッサージ（No.1, No.2, No.3）、背中のソフトマッサージとしてのタクティールケア（No.4）であった。No.1, No.2の文献は2つ以上の部位に対しマッサージ行い、No.2の文献は足浴とマッサージを組み合わせていた。

3) 研究の目的

すべての文献（No.1, 2, 3）が、マッサージの演習を取り入れ学生の学びについて明らかにすることを目的にしていた。

4) 研究デザイン

研究デザインは、演習終了後の感想の質的分析（No.1, 2）、演習終了後の質問紙調査（No.3）となっていた。なお、演習方法は、マッサージを学生間で相互に体験する方法（No.2, No.3）と、患者役としてマッサージの体験をする方法（No.1）で行っていた。

5) マッサージ演習を演習に導入している看護領域

マッサージ演習を導入している看護領域は、高齢者看護領域（No.1）・基礎看護領域（No.2）であり、1件（No.3）は、高齢者看護領域と成人看護領域で演習を実施していた。

6) 看護学実習前の学生のマッサージ演習による学びについて

(1) 看護師役（マッサージ実施者）によるマッサージ演習の学び

マッサージ実施者としての看護学生の学びとして、侵

襲性が少ない（No.3）、手技が簡単である（No.3）、上手くできた（No.2）、力加減が難しい（No.2）などが上がった。また、練習して技術を身につけたい（No.2）、実習のいろいろな場面で使える（No.3）、患者さんにマッサージをやってみたい（No.2）、実習ですぐに実践できる（No.3）と評価されていた。

また、マッサージを行い、相手に好意を持てるようになった（No.1）、距離が近く親しみを感じていた（No.1, 3）、コミュニケーションの手段となる（No.3）ことを体験していた。スキンシップにより心を開くこともありそう（No.1）、実施者の自分自身も気持ちよく心地よくなってきた（No.2）、人に喜んでもらい幸せな気持ちにさせることはいいことであると再確認できた（No.2）という学びがあった。演習授業においてマッサージを体験した学生の評価は、特別な技術がなくても、気持ちがよいマッサージができると感じた（No.1）、技術よりマッサージを行う行為がケアになっている（No.1）であった。さらに、今までマッサージがここまで効果があると思わなかった（No.2）とマッサージを実際に経験することにより学生は様々な学びをしていた。

(2) 患者役（マッサージを受ける側）による演習の学び

患者役（マッサージを受ける側）による学生の演習の学びとしては、生理学的効果として、手や足が温かくなったという循環効果（No.1, 2, 3）や、皮膚がしっとりしたという保湿効果があることを体験していた。心理的効果として、癒された（No.1）、リラックスした（No.1, 2, 3）不安や悩みがあるとき相談しやすい場であり安心感が得

られた (No.3), 眠くなった (No.1, 2, 3) など感じていた。また, 誰かに触れられていることが嬉しかった (No.1), 一生懸命実施してくれる実施者に対し感謝の気持ちが生まれた (No.1), コミュニケーションの機会となり (No.2) 気持ちが伝わり心を開いてくれると思った (No.2) などを感じていた。一方で, くすぐったい (No.1, 3), 痛い (No.1), 強めのマッサージがよい (No.3), マッサージオイルが不快 (No.3), 足を触られることが恥ずかしい心理的抵抗感 (No.1) などマッサージを実際受けることによる様々な体験していた。

3. 臨地実習においてマッサージなど触れるケアを実践した看護学生の学びについて

臨地実習にて触れるケアを実践した看護学生の学びは, 5件 (No.4, 5, 6, 7, 8) であった。以下, 文献の概要を表2に示し, 看護学実習でマッサージを患者に実践した患者の効果と, 学生の学びについて述べる。

- 1) 研究対象者および触れるケアを行っていた看護領域
研究対象者は, 成人看護学実習で肺がん患者を受け持った学生8名 (No.4), 高齢者看護学実習を実施し

表2 看護学生が臨地実習において触れるケア実践した文献の概要

No.	著者 (年)	ケア内容	目 的	研究対象者	研究デザイン	結果の概要
No. 4	山崎裕美子 (1999)	背部, 手のマッサージ	看護学生のタッチの実態を知り, 患者―看護師関係が良好な変化を見せた事例を記述し, 教育的な関わりとの関連を検討する	成人臨床看護学実習で肺がん患者を受け持った8名の短大生	質問紙調査と実習記録	実習4日目から, マッサージをすると患者の心に入りやすく, マッサージを実施する前の患者の印象が変化し共感的に関わるようになった。マッサージの看護援助により患者の疼痛が軽減した。
No. 5	渋谷えり子 (2011)	背 部 マッサージ	臨地実習における意図的タッチの活用状況を分析し, 意図的タッチの教育方法を検討する	3年次の看護大学生5名に行動場面に つ い て, 行動随伴性理論より分析した	看護学生5名に半構成的面接を実施し質的に分析	学生は, 患者とのコミュニケーション手段としてタッチを活用していた。意図的タッチの行動場面についての分析結果からは, 意図的タッチを活用後の患者の反応から, 行動を強化する良い反応が得られていた。
No. 6	大須賀恵子 濱畑 章子 小松 美砂 大塚 静香 佐藤 光年 福島 弘枝 菊井 友 (2012)	足浴 足をさする	養護教諭学生たちが, 臨床実習における受け持ち高齢患者に対して, ケアリング (ケア) を行った内容を分析すると同時に, 高齢者からケアされる体験のプロセスを明らかにする	総合病院において臨床実習を実施したA大学養護教諭コース学生6名	半構成的面接を実施し質的に分析	面接の逐語録を学生から高齢者へのケアリング, 高齢者から学生へのケアリングの視点で分析した結果, 高齢者―学生間に相互作用としてのケアリングが行われていた。学生の行動は, 「会話」「傾聴」「手足のマッサージ」「手を拭く」「手をつなぐ」「足をさする」「足浴」その他小さな心のこもったふれあいをすることで, 徐々に高齢者とのコミュニケーションの成立に成功した。学生が相手から受ける行動や感情などを分析した結果, 「高齢者が自分に感謝してくれる」「高齢者が自分を気にしてくれる」「高齢者が自分を励ましてくれる」という3つのカテゴリーが抽出された。
No. 7	緒方 昭子 奥 祥子 矢野 朋実 竹山ゆみ子 田村真由美 内田 倫子 (2014)	ソフトマッサージ	看護学生が臨地実習で患者に触れるケアとして, また患者とのコミュニケーションの手段として用いることができる, タクティールケアに準じたソフトマッサージの演習を取り入れている効果の検討	看護学領域実習終了時の学生55名	質問紙調査	学生の50%がソフトマッサージを実習で実施したと回答し, 自由記述から患者の反応として「気持ちがいいという言葉が聞かれた」「いつもより会話が進んだ」「リラックスしていた」などが寄せられ, 「実施してよかった」「患者の力になりうれしかった」「触れる・手を使うことの大切さを実感した」などの感想が得られた。
No. 8	岡田 朱民 西山ゆかり 小山 敦代 小島小乃美 田村真由美 糞谷 康子 山田 皓子 (2012)	指圧 マッサージ	大学看護学部における補完代替医療／療法の教育履修者が, 臨床及び臨地実習においてどのようにCAM／CATの実践 (経験) をしているかを明らかにする	CAMに関する科目を履修した卒業生35名・4年生31名, 面接は卒業生3名と4年生4名	質問紙調査と面接調査	(1) CAM/CATの知識・技術を集積させて看護実践活動へ活かしている, (2) CAM/CATの理念が看護の考え方の根底に根付き, 看護者が独自に介入できる方法としてCAM/CATがあることを学んでいることが明らかになった。

た看護学生5名（No.5）、高齢者看護学実習を実施した看護学生6名（No.6）、成人看護学実習を実施した看護学生5名（No.7）、すべての実習をした看護学生4名と卒業生3名（No.8）であった。

2) 研究の目的

看護学生の実習でのタッチの実態を検討し教育方法を検討する文献が2件（No.4, 5）あった。高齢者に対し、ケアを行った内容を分析し体験のプロセスを明らかにする文献が1件（No.6）、大学看護学部における補完代替医療／療法の教育履修者が、臨床及び臨地実習において、どのように代替補完療法の実践をしているかを明らかにする文献が1件あった（No.7）。

3) 実施したケアの内容

実施したケアの内容は、足の指圧およびマッサージ（No.8）、手足のソフトマッサージ（No.7）、手足のマッサージ（No.6）、肩のマッサージ（No.5, 4）、手のマッサージ（No.4）であった。

4) 研究デザイン

2件（No.4, 5）は実習終了後に質問紙調査を行い、統計分析を実施していた。3件（No.5, 6, 7）は半構成的面接を行い質的記述的に分析していた。

5) 看護学生がマッサージを実施した目的

看護学生がマッサージを実施した目的は、癌性疼痛を訴えている患者に対し苦痛を取り除くため（No.4）、肩がこると訴えていたため（No.5）という痛みの緩和目的であった。不安そうな患者に対し背中をさする行為を行う（No.5）不安の軽減目的や、便秘解消のためマッサージや指圧を行う（No.7）、母性看護実習では足部の浮腫を軽減する目的であった。3件（No.4, 5, 6）は、関わりを持つことが難しい患者に対し、マッサージをコミュニケーションの手段として活用していた。

6) 看護学実習でマッサージを患者に実践した学生自身の学びについて

看護学実習でマッサージを患者に実践した学生自身の学びでは、患者から、気持ちいい（No.4）、少し楽になった（No.4）、患者がマッサージを喜んでくれた（No.5）感謝の言葉をかけられる（No.6）などの快の反応があった。また、患者の身体的変化として足部の浮腫がだんだん良くなった（No.7）とマッサージの効果を確認することができた。

また、マッサージを施行することにより患者の状態を聞く機会となり（No.4）、コミュニケーションの手段となっていた（No.5, No.6）。自然に患者の心に入りやすい（No.4）、患者の痛みを理解できる（No.4）、見えなかった患者像が見えてくる機会（No.4）となったことが上がった。さらに、マッサージを実施することで患者から癒される（No.6）という学びをしていた。

IV 考察

近年マッサージはホリスティックなアプローチとして注目され、患者の安楽やリラックスをもたらす効果があることが報告されている（新田, 2004）。看護においては、患者に直接手で触れ行うマッサージなどのケアは、重要な看護技術の一つとして位置づけられている（川原, 2009）。しかし一方で、看護の臨床においてマッサージなど触れるケアは、看護の範疇として入らないプラスαの部分として看護の中心に位置づけられていない現状がある（川原他, 2009）。その理由として、マッサージについて知識や技術不足から、看護師がマッサージを用いたケアに対する自信を持つ事ができないことが挙げられる（新田他, 2007；川原他, 2009）。

今回の文献検討の結果から、マッサージの演習を受けた学生は、特別な技術がなくても、説明を受け行うだけで気持ちよいマッサージができる（No.1）、マッサージの技術より、やってもらっている行為がケアになっている（No.1）、今までマッサージがここまで効果があると思わなかった（No.2）と、マッサージを実際に体験することで、ケアに対する自信を感じていた。このことから、実習のいろいろな場面で使える（No.3）、患者にマッサージをやってみたい（No.2）とマッサージを実施する動機づけになっていた。

そして、看護学生は、臨地実習の場面でマッサージを実施したことで、患者から気持ちいい（No.4）、少し楽になった（No.4）など、マッサージを喜んでくれる（No.5）、感謝の言葉をかけられる（No.6）という体験をしていた。

看護師を対象とした緒方ら（2012）の調査では、マッサージなどの代替補完療法を看護基礎教育で受けた看護師はごくわずかで、そのため臨床で実践している看護師は全体の2割程度と少ない現状を報告している。今回の文献検討から、看護教育の中でマッサージなど触れるケアの演習を行うことが、ケアが提供できる自信に繋がり、体験を通しケアの価値を実感することが、マッサージなど触れるケアを実践する看護師が増える可能性が考えられる。

また、相手に好意を持てるようになった（No.1）、距離が近く親しみを感じた（No.1, 3）など、コミュニケーションの機会となっていた（No.2）。

近年の看護学生の特徴として、筆者らの経験では、他者との交流が不得意であり、特にお互いに深く踏み込むような関わりが苦手な傾向があると感じている。緒方ら（2014）の報告では、ネット社会の影響などから、言語でコミュニケーションをとることを苦手とする学生が多く、実習を苦痛に感じる学生が多いと述べている。本研究結果においても、高齢者看護領域実習で患者が積極的

コミュニケーションをとらない学生の不安 (No.6), がん患者に対しどのように関わっていいのかという学生の不安 (No.4) が報告されていた。

しかし, 実際マッサージを施行すると, 患者の状態を聞く機会になり (No.4), コミュニケーションの手段となっていた (No.5, No.6)。さらに, マッサージを実施することにより, 自然に患者の心に入りやすい (No.4), 患者の痛みを理解できる (No.4), 見えなかった患者像が見えてくる機会 (No.4) となっていた。

前川ら (2006) の報告では, 看護学生の臨地実習の不安は, 患者とコミュニケーションがとれるか, 沈黙したままで実習が終わったら悲しいなど, 患者とうまく付き合えるか不安を抱いていたと述べている。精神看護領域においては, 慢性期精神疾患患者は, 言語的コミュニケーションが極端に少なく看護師が戸惑いや不安を感じることが少なくない (鬼頭, 2013)。このような精神疾患患者に対し, 経験年数が長い看護師の場合でも, 困難感を抱き看護師のストレスになることが報告されている (瀧川他, 2005)。精神疾患患者に初めて接する学生の場合には, 不安や緊張ばかりでなく, 患者の反応が乏しく対話が続かないなどの症状の特性により, 実習場面で言語的コミュニケーションを看護技術として活用できず困難を感じることが多い (吾郷, 2001)。このような場面において, マッサージなどの触れるケアを施行することは, 患者の苦痛や安楽の目的だけではなく, その場に居留する一つの手段になり得ることから, 学生がコミュニケーション手段として活用できると考える。

また, 本研究結果では, 誰かに触れられていることが嬉しかった (No.1), 気持ちが伝わり心を開いてくれる (No.2), 実施者に感謝の気持ちが生まれていた (No.1) ことが示されている。木幡ら (2004) は, 意図的に触れることは, 互いの感情を伝える交流をもたらし, その結果, 患者に安心感が生まれ相互の信頼感を育むと述べている。本研究においても, マッサージが非言語的コミュニケーションとなり相互の信頼関係が生まれていたと考える。西山ら (2013) は, 臨地実習で受け持ち患者に看護師独自で判断でき, 応用できる代替補完療法を応用することにより, ケアリング力のある看護師を育成できる可能性を述べている。本研究の臨地実習場面では, マッサージを通し患者から癒される (No.6) 体験をしており, マッサージによる相互交流により, ケアリング効果が生じていたと考えられる。

今回の文献検討では, 学生が, マッサージなどの触れるケアを学内演習で体験し, 習得したケアを臨地実習で活用することにより, 様々な体験を通し成長の機会に繋がっていることが明らかになった。近年の学生の特徴から, 今後はケアリング力が高い学生を育てるためにも,

看護ケアとして非言語的コミュニケーションの方法の一つとしてマッサージなどの触れるケアを看護基礎教育の中に導入する意義は大きいと考える。

V 今後の課題と展望

西山ら (2013) は, 看護基礎教育に代替補完療法を取り入れるため, 教える人材の整備や, 教育実践の場に代替補完療法を学ぶ機会が必要であると述べている。本研究においても, 教育に導入し学生の学びを評価している文献は, 7件と少なかった。また, 精神看護領域での研究がなく, この領域においても, マッサージなど触れるケアに関する学生の学びについて探究する必要がある。それにより, 学生が看護基礎教育の中でマッサージなど触れるケアを実践できる機会ができ, 効果を学生が実感することにより, 卒業後臨床の場において, その経験と技術を活用することが期待される。

引用文献

- 安藤満代, 川野雅資, 谷多江子 (2013) 「精神看護学実習を通した精神障害者に対する対人違和感とイメージの肯定的変化」, 『インターナショナルNursing Care Research』, 12巻, 2号, 115-124.
- 吾郷ゆかり (2001) 「精神看護実習における言語的コミュニケーションの困難性--対話場面の交流分析より」, 『島根県立看護短期大学紀要』, 125-132
- 原田真里子, 櫛引美代子, 工藤千賀子 (2007) 『「リラクゼーション」, 「指圧」, 「マッサージ」に関する看護研究・看護教育の現状および学士課程教育における今後の課題弘前学院大学看護紀要』, 2巻, 1-8.
- 平尾由美子, 福嶋龍子 (2008) 「フットケアと手足のマッサージ演習での患者役割体験からの学び」, 『日本看護学会論文集, 看護教育』, 39号, 448-450.
- 今西二郎 (2010) 「統合医療をめざして」, 『京都府立医科大学雑誌』, 119巻, 5号, 301-312
- 岩吹美紀, 桂川純子, 竹内貴子, 渡邊弥生, 中島佳緒里, 杉浦美佐子 (2012) 「ソフトマッサージの講義・演習の効果--看護学実習の活用状況から」, 『日本赤十字豊田看護大学紀要』, 7巻, 1号, 77-83.
- 小山敦代, 中島小乃美, 中島真由美, 糺谷康子, 岡田朱民, 西山ゆかり (2013) 「看護系大学における補完代替医療/療法の教育に関する研究 (第1報) 全国の看護系大学における補完代替医療/療法の導入状況」, 『日本統合医療学会誌』, 6巻, 2号, 45-50.
- 川原由佳里, 奥田清子 (2009) 「看護におけるタッチ/マッサージの研究文献レビュー」, 『日本看護技術学会

- 誌』, 8巻, 3号, 91-100.
- 川原由佳里, 守田美奈子, 田中孝美, 奥田清子, 本江朝美, 田 晶子, 五味巳寿枝 (2009)「触れるケアをめぐる看護師の経験—身体論的観点からの分析」, 『日本看護技術学会誌』, 8巻2号, 46-55.
- 鬼頭和子 (2013)「残遺型統合失調症患者に対するフットケアの効果に関する研究」, 『名桜大学看護学研究科修士論文』, 1-61.
- 木幡祥子, 石田靖子, 渡邊敦子, 城戸秀美, 山田まり子 (2004)「患者への意図的タッチ—「触れること」「触れられること」の意味」, 『埼玉県立大学短期大学部紀要』, (6), 57-65.
- 前田節子, 岩吹美紀, 桂川純子, 竹内貴子, 渡邊弥生, 中佳緒里, 杉浦美佐子 (2012)「リラクセーション技術を取り入れた学内演習の試み」, 『日本赤十字豊田看護大学紀要』, 7巻, 1号, 77-83.
- 西山ゆかり, 岡田朱民, 梶谷康子, 小山敦代, 中島真由美, 中島小乃美 (2013)「看護系大学における補完代替医療/療法の教育に関する研究（第2報）各専門分野における補完代替医療/療法の導入実態」, 『日本統合医療学会誌』, 6巻, 2号, 51-61.
- 新田紀枝, 阿曾洋子, 葉山有香, 中平三枝子, 沼波勢津子 (2004)「化学療法に伴う遷延性嘔気に対する足浴後マッサージによるリラクセーション効果」, 『看護研究』, 37, (6), 517-528.
- 新田紀枝, 川端京子 (2007)「看護における補完代替医療の現状と問題点—ホスピス・緩和ケア病棟に勤務する看護師の補完代替医療の習得と実施に関する調査から—」, 『日本補完代替医療学会誌』, Vol.4, No.1, 23-31.
- 緒方昭子, 奥祥子, 矢野朋実, 竹山ゆみ子, 田村眞由美, 内田倫子 (2014)「臨地実習における意図的タッチの活用状況と教育の課題」, 『南九州看護研究誌』12巻, 1号, 33-40.
- 緒方昭子, 奥祥子, 矢野朋実, 竹山ゆみ子, 田村眞由美, 内田倫子 (2014)「ソフトマッサージの講義・演習の効果—看護学実習の活用状況から」, 『南九州看護研究誌』, 12巻, 1号, 33-40.
- 岡田朱民, 西山ゆかり, 小山敦代, 中島小乃美, 田村眞由美, 梶谷康子, 山田皓子 (2012)「明治国際医療大学看護学部における補完代替医療/療法の教育履修者の学び」, 『明治国際医療大学誌』, 7号, 35-43.
- 大須賀恵子, 濱畑章子, 小松美砂, 大塚静香, 佐藤光年, 福島弘枝, 菊井友 (2012)「看護実習において学生が高齢者とケアリングするとき」, 『愛知学院大学論叢心身科学部紀要』, 8号, 7-15.
- 岡田朱民, 西山ゆかり, 小山敦代, 中島小乃美, 田村眞由美, 梶谷康子, 山田皓子 (2012)「明治国際医療大学看護学部における補完代替医療/療法の教育履修者の学び」(原著論文), 『明治国際医療大学誌』, 7号, 35-43.
- 渋谷えり子 (2012)「臨地実習における意図的タッチの活用状況と教育の課題」, 『埼玉県立大学紀要』, 13巻, 67-72.
- 鈴木啓子, 平上久美子, 鬼頭和子 (2013)「統合失調症患者を対象としたハンドマッサージのリラクセーション効果に関する研究」, 『名桜大学総合研究』, (23), 53-62.
- 瀧川薫 (2005)「精神障害者関連施設における看護者と福祉関係者のストレス」, 『滋賀医科大学看護学ジャーナル』, 3巻, 1号, 42-48.
- 山崎裕美子 (1999)「看護学生の臨地実習におけるタッチ活用の実際と教育的関わり：患者—看護学生関係の形成及びケアリングの視点による検討」, 『大阪市立大学看護短期大学部紀要』1巻, 73-81.